



於
22/
2

卷之二

五
集

繪本通俗三國志初編卷之二

目錄

祭天地桃園結義

劉玄德破黃巾賊

安喜縣張飛鞭督郵

何進謀殺十常侍

繪本通俗三四志初編卷之二

祭天地桃園社義

熟邦家の貞廢と云ふ古事今至る治極と久の則ち
乱入乱極と久の則ち治入の理陰陽の消長寒暑の
往来もさうがじと。ものゝ人君ひど小きと競て業じて。あら
くはあくとまきを忘むぞ堯舜もあ代病とと冗々庸人も。漢
の高祖三尺の劍といひびげて秦の乱を平めり。哀帝乃御
宇を。二百余年天下を治り。王莽士女を位を簒て海内又
大々乱る。あらうて光武をまで平て後漢の世を與す。質帝
桓帝の御時までをも二百年をより光武帝より十二代の
天子を。靈帝とよなである。桓帝の簒を受て御年才一歳と帝

佐よ郎々。あると大將軍竇武太傅陳蕃司徒胡廣三人。
相共々天下の政務をほこごう。君を補佐しなむ。そのうち内
宮。曹節王甫といふものあつ。縮僕。すく君を欺た。権柄
をわづがらせらる。竇武陳蕃あるをを除せんと。行かれき
あえ。支とその身を害せり。あると内官いふく志を得て。不
ひまゝ朝綱を手よ握き。建寧二年四月十五日帝溫德
殿よ出御。すく。さもよ御座よ著んと。仕事ふきに餓う。殿角よ
り狂風あむく。その長二十余丈の青蛇梁の上よろびりく
椅子の上よ蟠り。されば帝えよどぬうせむひ地の上よ胥倒
き。殿中の騒動あむからず。百官皆上と下へ及く。武士をやまと
おとを搜せんと。あると大蛇ハ消がおとくよ失へ。雷の鳴と。そ
事よあらじと。改元あり。熹平五年又あらじと。光和と。号を諸處よ怪異
あると。あると。熹平と。号を。あると。边境付。旗
の事あり。唯雞化。雄と。六月朔日十余丈の黒氣地よ起
と。飛と。温德殿。秋七月玉堂の内よ虹あらられ。五原山の岸
あると。ぐ崩る。そのわざと。怪し。事。れ。虹を知る。あらじと。ま
あき。城よ。人の慎。天下の大。あらじと。勅。と。群臣。金商門

地を碎。かぶと。雹。まく。の。大雨。ねずみ。よい。内。静り。洛陽城中の
民家。松千軒壊。破。死。多。希代の
珍車。うと。あや。ひ。四年三月。洛陽。まく。地震
。禁門。省垣。あ。ぐ。倒。海水。あ。れ。登葉。沂密。渤海
。死。闕。入家。と。大波。まれ。百姓。死。多。の。松。主。知。是徒
事。あらじと。改元。あらじと。熹平。と。号。を。あると。边境。付。旗
あると。あると。熹平。と。号。を。あると。光和。と。号。を。諸處。よ。怪異
の事。あり。唯。雞。化。雄。と。六月。朔日。十余丈の。黒。氣。地。よ。起
と。飛。と。温。德。殿。秋。七月。玉。堂。の。内。よ。虹。あ。ら。れ。五。原。山。の。岸
あると。ぐ。崩。る。その。わ。ざ。と。怪。し。事。れ。虹。を。知。る。あ。ら。じ。と。ま
あ。き。城。よ。人。の。慎。天。下。の。大。あ。ら。じ。と。勅。と。群。臣。金。商。門



あつよ集と薬を除の術を問ひ乍ら。光祿大夫楊賜。儀郎蔡邕。二人表を上まほくやう。近年打続怪異の事多起りし。表され亡國の兆あり。天子より漢朝を守る意を示す。君臣を戒め古より天子性をりふ。至るも徳を修といへり。内官権を執て天下の禍を免む。是を除め天災自ら消滅。ひそよ奏聞され其事下ちされ。楊賜。蔡邕。内官の為殺さんをせし。呂強といふも蔡邕が才を惜し命とぞ助け。其後内官は張衡。趙忠。封脩。段珪。曹節。侯覽。蹇硕。程曠。夏禪。郭勝。らの十人。まる君主猪事。専天下の政を掌す。是を十常侍と号す。朝廷敬重むと師父のぶと猪の官。其門下。よ付候。阿服せとを考へ。中平元年甲子の歲。鹿郡張角。

とりふ者あり二人の弟を張済。張寶といふ。元来不似の秀才。うるうぶ。或日山中より來を採。一人の翁よ逢ふ。乃羽朋のうち碧にして顔ハ童子のこと。手よ葱の杖を携。張角を呼び怪き洞のうち。又到り三巻の書を授て受け。是を太平要術と名づ。汝よく此書を讀で。只つねよ道を行ふて。若を施す。天よ代て。昔く人々を救へゆを思へ。若惡ふを起ゆるを心む。身を亡ぼしがきどと云け。張角再拜して其名を問ふ。我、南華老仙。すと云ふ。と答ふ。一陣の風ふきをくり行ぐ。一とぞ飛ちけり。張角此書を讀で晝夜をここう。学び遂に而をよび。風をよぶの休を得て。自ら太車道人と号す。天下大よ疫病に行れて死する者多く。張角あすく水をやることよ

詒をゆむどりふ者ちく。國ぐく張角が座あふ赤りて自ら
其邊を讐悔。みな立ところよ承復を。張角これより大賢
良作と立ち。百余人の弟子をに方よからて病をねし。三
十六の方を立て大小を分ち。皆將軍の名を以て方よ名づく。
此も又大方を行ふ者一萬余人。小方を行ふ者六七す。
みま一部の長を立て。蒼天已死。黃天當立。歲在甲子天
下大吉といはやうせ。甲子の二字を出て。うすく施す。ト
郡縣市鎮宮觀寺院ことごくあれを推すといふよりな。そつ
後青刃凶刃徐刃異刃荆刃揚刃充刃豫刃の間みハ
あく又大賢良師張角とおど故の貴の鬼神を礼をうぶ如く
ありげば張角心の内よ非分の望を発。先大方の馬元義とい

ふ者よ金銀を持せ禁裏入り。密山よ十常侍が心を結を
し。封諱徐奉ホ。内通ノキ。頭三人。弟。張梁。張
寶を呼び。至く得て。民の。今民の。を失ふ。頭二
人。若此。と。至る。舉て天下を取る。万民の。望を失ふ。頭二
人。不意を。張梁。張寶も。元より。望む。と。後を。ひく
張角大よ喜び。一やう。黄。旗。造り。三月五日。一同
に。起さんと。唐州。といふ。弟子。書簡。持せ。禁裏。入
て。内。頭。あたる。封諱。徐奉ホ。告じ。む。唐州。よ
き。ふ。を。変。直。よ。奉行。石。行。事。仔細。訴。乞。を
ば。帝。入。よ。ふ。道。ひ。大。將軍。何。進。よ。命。と。まだ。馬元義。主
生。取。首。刎。肉。内。忘。せん。仕。する。き。と。千余。獄。よ

下へや。張角。車のあらしきをと見そ。とてやう。兵を起す。自ら天公將軍と号す。張梁を地公將軍と号す。張寶を人公將軍と号す。百姓をあそせり。今漢の運氣とぞよき。大聖人世よ生なり。你は宜く天よ順て太平を樂めと云々。四方の民よきゆくと來り集り。とえ黄の絹と白の頭とほき。世の人よきと黄巾の賊と号す。張角をどよ四五十分の勢と得て。在所より火と放ち。人の財宝とよどみ取る。よどみと地頭官吏も防ぐべからず。とて逃げられ。その騒動をあらう。大將軍何進。主と誅せんと。帝よ奏す。諸所の守護職と命じ。軍勢と催促せしも。盧植。皇甫嵩。朱雋。三人を大將とし。三手よもうち追討せしむ。是と云。

張角が軍。幽州燕州の界を手痛く犯して。大守劉焉。ふきと防がん為。校尉鄒靖といふをよ命じ。諸所高榜を立す。忠義の兵をあわせしむ。そのあら涿縣の樓桑村といふ。よ。一人の英雄。是人はねよ言ことひて。禮と似ぐ人よ下り。喜怒色よあらざだ。天トの名あくと姿とこと。その志まきと大なり。身の長七尺五寸。両の耳肩よなき。左右の手膝とてとよ。よく目とねく。その耳とてえり。漢の中山靖王劉勝の後胤よ。と。景帝の玄孫。劉備。字は玄德。父を劉弘といひ。幼はて喪。母よ車に孝とほし。自ら履を賣。席と織よ家業と。舍の東南の方よ大きい桑の木。高五丈余。よこよよ望り重ことと車蓋。往來の人此木を見よ。

尋常よりはとく。李定といふ人是を見た。此舍より多く貴
を出さんといきり。至る年二十八歳。すつまぶ。天下より黄巾の賊蜂起
て。國より忠義の士とまねくと聞て自ら坐て州郡より立てる。高榜を
読む長嘆」と歎らんことをす。後より大うる聲をあげて。大丈夫の
士。國の力を出すぞ」と。何事をも長嘆をもど。詞を
さるをあつた。玄徳屹と後ともをも其人自身の長八尺。豹頭環
眼燕領虎鬚聲雷がごと。勢力をひ奔馬と似たり。とまち立回
て其名を問ひ答へ曰く。某の張飛字は翼徳といふをあつた。世く
涿郡より住居ととほの田地と持酒と賣猪屠と家業と。
専ら名ある人と相交つる。今此れととがよ。足下の高榜の下
よ。長嘆してかまつた。おき如何あるもぞ。玄徳の曰き

玄徳酒
商不爲
必張飛
家不可

いまも流落されども。そと漢室の宗族。劉備字は玄徳と
いふをあつた。近づき淮苗巾の賊。志をもつて州郡を掠めあがやく。
武まれ生平。けや社稷を扶けんと思つて。力の足がるを恨み。張飛曰く。
さくとさくとさくと。合ひ。そろそろあらが我より從ふもの四五人
ゆ。そと玉志をあつて大儀の行畧をやんと。伴うと本徳の家
よきなり。酒を飲んで相樂ちうやく。又一人の男来り。一輛の車を
酒店の門外。よどりを内へ。柔の木の下に坐。家主とよんや
酒を買。玄徳その体をこれば。身の長九尺五寸。髯の長一人八寸。
面は重束とのあく。唇は抹朱の赤。丹鳳の眼。卧蚕の眉。相白
堂。威風凜々たり。むく。むく。入と名を問ひ。荅へ。曰く。ま
河東解良のもの。関羽字は雲長。始壽長と云えり。先年郷の

豪雄勢ひよりて我を侮り。我されを殺して江湖の局
ひどく逃れ流良もるより六年なり。今黄巾の賊蜂起して關
づの守護英雄の士を招く。我此も又走りたり。玄徳大喜び。
我志ざーの程を詳らうよ語りければ、關羽天の助なりと喜び
共々張飛が家みやきて、義兵を起さんを議。三人の内
玄徳。年長ト乍ら三入再拜して兄とを張飛がひそく御宅の邊
なる枕の園幸み花の盛なり。明日白馬を宰て天を祭す。
鳥牛を殺して地を祭り。三人生死の交りを結む。ついに玄
徳關羽あらがと同ト。次の日枕の園より金紙銀錢を
ばらぬ。牛馬をこうべて天地をまつり共ひよ再拜して誓て曰く。
今此三人姓氏異なりとも。結んで兄弟となり。心

を合せ力を恨せ。漢室を抜け上へ國家み報。下へ萬
民を救ふ。同年同月同日生を望も願く。同年同
月同日死人。白皇天后土この心を照鑒。若義よ背き恩
と忘れ。天人共よ誅戮をぞーとて。祭りありて玄徳を兄
と。関羽次に張飛をそつ次ヒ。共よ玄徳の母を拜。其後郷の内みて腕立ちる者共をあつて枕の園にて酒宴。
三百余人よびけれ。明日より旗と舉んと矢も馬一匹も
なけ。如何せんと案ぢる。誰とへとく。役十人歩つて多く
く馬を引せたまへく。此とあらへ向ひ来る。口を玄徳の曰く。此
天翁と助なりとて。共よ坐て此を足れば中山の大商人よ。張益
平。蕪双とつ考へ。毎年北園よりて馬を商なひけ



わが賊徒路を塞ひて往来をなほさる也。空へく故郷に
回るなり。玄徳むえへと酒宴をなし。逆賊を退治し。漢室を
助るの由を語りければ。張世平蘿叢其志を感じ。ト。駿馬五十
匹。金銀五百両。鉄一千斤を贈る。玄徳是をうけて。良巧三振
の劍を寄せ。関羽へ重きハ十二斤。青龍の偃月刀を作り。
冷艶鋸と名く。張飛ハ一丈八尺の蛇矛を造り。甲冑までも
一齊に備りければ。さらば財を廻さず。うち立て。其勢五百余
騎よ。幽州劉太守劉焉大よ。及び其姓名を向。漢室の宗
親なりとて。家の系緒を語られければ。劉焉は名を敬い。相親
む。叔姪のござ。又は黄巾の賊後大方程遠志といふ者五万余
騎よ。涿郡を犯れ。大守劉焉乃ち校尉鄒靖を大將と

1. 玄徳を先陣とて歩向て戰ひ

劉玄徳破黄巾賊

玄徳五百余騎よ。だらしに大魚山の麓よ。推よせなき。バ。賊軍五万
余騎よ。陣勢を張。玄徳、關羽、張飛を左右よ。そなへる圍の
逆賊。がんじ早く降らざると。叫えつけし。賊の陣より。副將鄧
茂といふ者。馬をとばして。歩て走て。張飛眼を怒らせて。虎鬚さ
うさはよ。立。大八の矛を舞。と出むえ。只一合はて。鄧茂を馬
よ。突落し。首を取て。餘くどうり。北。賊の大物程遠志。大よ
怒。と軌て。走る。關羽是をみて。ハ十二斤の青龍刀を提さず。
馬を躍らせて。出けい。程遠志。其勢よ畏れ。退んどまる所を。關
羽一刀よ。斬て落す。賊軍大將を討ひ。皆降る。先づ。バ。玄徳うち

取りたる首を路の峠とうげと裏うへをせ功を収て歎あはれく。太守劉焉りょうあんより元で少すくなむ諸軍を厚く賞たまむ。又青刀せいとうをすつ早馬はやま走はしり。太守龍景急を告ごうと報ほうつけられ。又歎あはれき牒文だいもんを披ひる。黄巾こうきんの賊徒城じゆじやうを圍いざなぐ。車くるまをとめ急きゅうなり。兵ひょうを與よすと後攻ごこうをせよとなり。劉焉りょうあんらち玄德げんとくを嘆あはれんで如何いかせんと議ぎす。玄徳げんとくを抜け。玄徳げんとくを先手さきてと。青刀せいとうを赦ゆるむ。玄徳げんとくの一軍いつぐんをと。賊の陣ぢんをうちく推すす。其その体たいを窺うかがひ。益ますく髪はつをみだと。黄きさろ絹きぬと額ひこいをつ。八卦はっけつの文もんをあて證あてす。赦ゆるの表ひょうを見て引分ひきぶんてあれを拒うそぐ。玄徳げんとくと百余騎よきとて入い乱らんして戰たたかい。也よも賊賊ハ目めにうまうまる大勢だいせいと。新手しゆじゆをへうへく拒うそぎ。一いつハ玄徳げんとく戰たたかい。而はて三十

里り引ひき退たがき。關羽かんう張飛ばんびと相あ議ぎ。而は方ほう勢せい寡寡くわんと勝かつりある。且また明日あした奇き兵へを出だすと。賊賊をやぶらんとて。關羽かんう付つけて山さんのたよたよ伏ふ。至いた。張飛ばんびは子余騎よきを付つけて右うよう伏ふ。皆みな金かなを鳴なるをを相あ當とうと約あく。次の日ひ鄒靖しゆせい玄徳げんとく一いつ手てよめりと推すすをられ。賊賊の大勢だいせい。闇くらのゆくがめくよきとい蒐くわり。喊けんの乞うる大おほい農う。玄徳げんとくしぞらく戰たたかい。体たいよて詠うたりて退たがけ。賊賊軍ぐん急きゅうよ追おきた。をとに山さんの辻つじよちう。玄徳げんとくの勢せい一度いちどよ金かなを鳴なる。ければ左ひだりよ關羽かんう右ひだりよ張飛ばんび。三手みてよ分わけく。計けいと。土つち三方さんぽうよ取と卷まき。而はて賊賊軍ぐんを破はじく。四角よかく八方はっぽうよ逃のがれ。玄徳げんとくいきゆひよ乘のく。青あお色いろの城じゆよ殺ころ到いたす。城じゆ中なかより是これを見え。本ほん守まつ龍りゆう。景けい門もんをひらひとて出だれ。賊賊軍ぐん前後ぜんこうよ度とを失うす。

右往在性は落失。青兎の圍みたちまち解み。又太守
大喜び重く諸軍を賞。けれど鄒靖軍を収と國に
回らんと。時ふ玄徳にされば。もう中郎將盧植勅命をう
けぞ。賊の首将張角と廣宗と。城ときけり。我昔一公孫
瓚と共。盧植を師とせり。今。力を合せ共。賊を平ぐ
が。鄒靖が曰く。某いほど主の食を受ざき。彼輕くもや
く。叶は。足下若ひ。兵狼ハ心のすゝり。齒兎の
勢。某ことなく。收毛らん。玄徳あきよ。手勢。日余騎
を引て。廣宗。到り。盧植。右の趣を語り。盧植
大喜び。重く賞。と手下。留む。時賊の首ね。十。万の勢
みて。廣宗。又。安。一万の兵と。日々。攻戰。赤壁

ぐ。勝負もかく。られ。盧植。即ち玄徳。向て。見く。此而
の賊軍。みな。要害。引。もあり。急。勝負。ある。べからず。今
賊の弟。張梁。張寶。二人。頴川。在て。官軍。皇甫嵩。朱儁。
相戰。ふ。今。赤壁。千余騎の官軍。を借。と。い。とき。是よ
ア。頴川。よ。ひ。て。戦。を。扶。け。玄徳。を。な。うち。牒狀。を。請。取。千
五百。余。騎。よ。て。頴川。よ。向。る。此時。皇甫嵩。朱儁。賊將。張梁。
張寶。と。拵。み。戦。ふ。り。被。交。よ。及び。賊の勢。歩。負。て。長社。と。云
ふ。所。よ。引。退。き。草木の深。き。下。よ。陣。を。取。れ。ハ。皇甫嵩。高。手
の勢。を。忍。で。敵の後。よ。廻。し。諸軍。よ。根。穴。把。を持。せ。夜。の。二。更。の。こ
ろ。四方。よ。推。す。せて。一度。よ。火。を。う。け。喊。を。そ。ぐ。て。ほ。れ。打。ふ。
風。急。は。て。火。焰。天。を。雰。て。賊の勢。共。上。を。下。と。さ。き。立。て。馬。よ。鞍。

をく暇もなく。へハ甲を被ふも及むべ。十方よ散乱せり。
張翼、張寶。這てのれと走りて向とう一夥の軍馬。三
な、赤の旗を指て先よ進む。又一人の英雄。身の
長じて細眼長。鬚膽量。よもぎ謀衆よある。常よ齊
桓晋文匡扶の才だきを笑ひ。趙高王莽。縱横の策少
なきを嘲けり。兵法ハ吳子孫子よ劣らむ。沛國譙君。いふ
曹操字ハ孟德。小字。を阿瞒と称し。又吉利ともい。乃ち漢の相
國曹叅。より二十古代の後胤。はて大將軍曹嵩が嫡男なり。官騎
都尉。又封うる。今黄巾の賊を破えとて。安寧。千余騎。よて駆き
たり。路を塞いで。攻め。首を取す。万余級馬物の具をうそを
い取。皇甫嵩朱雋よ見へ。一手よ威々逃る敵を追見る。玄德
たれべ。必も廣宗よひて。張角と一手よゆるび。而邊早く
馳うる。盧植よ力を合せて。怠る。のろう。玄徳是よ因
て。又廣宗をにて引くを不よ。向て二三百人の兵共罪を
車よ載て生来る。玄徳なきをえと怪。近くなつて。生きを刃を
乗たる罪。中郎將盧植。あ。勢を下して。其を問ふ。
盧植涙を流して曰く。我。なく廣宗よ在と。張角をどりかと
み。ゑ。なく。戦ひ勝。ふ。張角。う。き。体をやぐる。ま。益く
破りゆ。おど。近ごう。黃門を豊とす者。勅使して。來り。我よ
賄をいたるよと云ふ。我軍中よ。金銀とぞ。もうと。勅

使ふ敵まつるがき物ひゆどと呑ふ。此よりて左豐ふく
我を恨く。帝は詫ひて。極く我を罪ふ落。かの如く呑
捕て董卓を大將とて廣宗の賊を退治せても張飛きても
あいだは怒り。守護の武士を殺して盧植を殺へといひ免き
べ。玄德急ひ止めて曰く。是天子の勅令なり。安なんぞ躁
き。關羽が曰く。今盧植を罷らる。我等不如涿郡は面れがし。
玄徳あれど促む。兵を引く進む所。勿心ち山の後よ喊の声き
こへく馬。烟。傍。起り。一。岡の上。登てこきを望む。廣宗よ
て。友軍。城員ぬと見え。黄巾の軍勢。天公將軍とあたる旗を先
み進め。官軍を追蒐るなれど。玄徳の曰く。是へ張角が勢
なり。友軍を殺へども。うろふキドとて。關羽。張飛と馬の鼻を

うち。討て出で。張角が勢大よ驚き。ともや敵の伏勢に
蒐。後を塞。まとく我先と。引回。られ。玄徳いよくを
んで。賊の勢力を四角八方へ歩ちら。五十里あり。追うけたり。
董卓。廣宗の戦ひまきて。賊軍よ追き。ハ。誰共。一。手
の勢打て出で。賊軍をうみぢらぬと報。ト。されば。立回りて玄徳
對面。礼すて。今如何。うる。友職。と向。玄徳。友佐。うき。田
を。答う。と。董卓甚だうる。と。了。恩賞をも。阿。も。か
張飛大よ怒り。我等。血を流して。大敵を破り。彼が辛き。命を
殺の。たまよ。と。恩賞こそ。なく。何と。亦の。あとく。よろ。へる
ぞ。我。おの。賊を殺さんと。示。舞。と。入ん。と。も。る。を。關羽。急。よ
ひき。と。引留。と。玄徳。諫。と。さ。れ。る。彼へ。友。を。き。朝廷の臣。殊。よ

許多士軍馬を領と我お若こきを殺さば。うそらど謀る
人と呼むふ。不如お乃あよ留る。どうらずとて其の度兵
を引具。朱馬が陣へ趣き。

安吉縣張飛鞭督郵

玄德兵を引く。朱馬が陣より加えられ。朱馬大よ喜び。やがて
先陣と。賊の張寶が陣へよせらるに。賊の大將より昇りふ
若馬を牛と。きづくかられ。張飛矛を舞ひ。二三合。鐵い馬より
下よ転て。おとと。方。空あし。空をひいて。一度よ喊を。化と攻入け
し。賊の張寶馬の上よて髪をさむき。手よ剣をとひて。口よ文
を唱ひ。俄よ風雷鳴をたえき。黒雲の中。大馬将。朱馬
P。勢のよ乗り。付てくる。官軍大よをどろき。散くよ。いもひそば
走進。大は賊の張寶。又髪をさむき。文を唱ひ。俄よ風雷天地
か震動。と。ゆ上で。一石を走らせ。黒雲の中。大馬將。のどくが
やくよ。付。や。大は。玄徳急よ。退く。賊軍よ。追。己よ。山を
の路を通る。而。一声の鉄砲ひき。み。百。士。軍ひ。と。て。彼は。れ
るもの。を。渦。ぎ。れ。が。心。ち。空。中。よ。う。或。へ。紙。よ。て。化。い。る。人形。草。を。東。た
る。馬。な。ん。と。徐。く。と。て。地。よ。落。風雷。自。ら。息。よ。る。賊軍法の破たつを

會文通鑑 卷之二

四十一

賊軍勝より。乗て掩殺。と。玄徳敗軍を收め。朱雋と。すりを議する。
朱雋が曰く。まし。姑休。うり。何を怪よ。たゞ。明日羊猪の血を携へ
て。兵を山の頂きよ伏立。賊の勢を追き。る。用。一度よ洒き。わけさせ
よ。此法。うち。と。破。く。し。玄徳。こ。き。よ。後。ぐ。又。百の勢。よ。羊猪の
血をおせ。其外多く。穢。き。れ。を。用。意。し。山の上よ。伏立。と。次の日。首兵
を。進。大は。賊の。張寶。又。髪を。さ。む。き。文を。唱。ひ。俄。よ。風。雷。天。地
か。震。動。と。ゆ。上。で。一。石。を。走。ら。せ。黒。雲。の。中。大。馬。將。の。ど。く。が
や。く。よ。付。や。大。は。玄。徳。急。よ。退。く。賊。軍。よ。追。己。よ。山。を
の。路。を。通。る。而。一。声。の。鉄。砲。ひ。き。み。百。士。軍。ひ。と。て。彼。は。れ
の。も。の。を。渦。ぎ。れ。が。心。ち。空。中。よ。う。或。へ。紙。よ。て。化。い。る。人形。草。を。東。た
る。馬。な。ん。と。徐。く。と。て。地。よ。落。風雷。自。ら。息。よ。る。賊軍法の破たつを



見て退くと北山のをより関羽一軍を引て討く。又右より
張飛が一軍討く。先敵くよ擇立されば討そむ。若敵をあらば。張
寶ハ一方を守破り。路を奪て走りるを地公ね宝どある旗
を目づけ。矢ふろ近くうちる。周玄德弓を據て射こう。射か
寶たの臂を射れ。えから陽城へ逃れもり。堅く守りて大きり
り此日の合戦は賊の勢三万余人討れ。降る者赦をしらひ。官軍
はいへ。陽城を圍み。日夜息をもそぐ。攻ム。其要害堅固よ
て未落す。一月あり。又及ム。レバ曲陽へ使を馳と。皇甫嵩が賊ぬ
張梁と戰ふ。勝負をやうむに使やがて。自りも。董卓勅令
を受て。なく。張梁と戰る。自が官軍。毎度。利を失ひ。けれど
帝又皇甫嵩より。董卓より代へ。をねふ。皇甫嵩兵を引
て。北向ひ。けれ。賊の首ね。張角廢す。弟張梁王者の礼を以て
是を葬る。皇甫嵩。手を引いて速やく。改う。七度まで。戰勝す。
ほの。張梁を曲陽にて切腹し。張角が墳を壘て。其首を洛陽
より上せし。降る者十五万。討れる者ハ。赦をしらび。これ
功よ。依と。皇甫嵩。車騎將軍。益民の牧。又封せられ。武騎校尉
曹操も。今度の忠戦より。濟南の相。又封せられたりと語り
けよ。朱雋。是をすて。早く。此城を攻落す。て。人て。皆恩賞に
預れ。と。大軍力を合す。切ども。射ども。クリ。喚き叫ん。と。攻
ム。北中を。よ。色めき立て。ともや。落人と見へ。る。而。の。賊の
勢よ。嚴政といふ者。張寶が首を取。城を開て。降らば。朱雋
己を平定す。と。洛陽より奏聞す。朝廷の百官己をす。

朱雋は官軍討を賜へらんと相議する所は勿心ち南陽より早馬きた。黄巾の余黨は趙弘韓忠孫仲といふ者三四十万余騎の益者を集め郡を動乱させと告げし。群臣帝又奏して曰く。朱雋今陽城を平げて其勢六万よ余れり。是を用て討へめひ。即ち詔を下す。先韓忠を先とておよ宛城よ到る。賊の大將趙弘この由を下す。先韓忠を先とて色を防ぐ。且西方の勢みな廩野よ先と陣を張。玄德真先まをみ鼓を鳴り喊を仰りそよ戦い。辰の刻より半の刻まで勝負の色えへざりし。朱雋自ら精兵をもぎり。牛と二千余騎城の東わす。蒐りよ。賊軍後を塞じ。トと思ひ急よ。退く所を玄徳大よとみ外んで攻められ。賊軍討え。若松を一うだ。皆我參して身を恙なくせんとながら。是寇を長むるの道をうへ。我此

先よと宛城へ馳へ。ハ官軍四方を圍んできびき。水も通せむ。城中已よ兵糧盈く。援の勢もよろれ。賊の韓忠人を牛て降参せん。を頼ふ。朱雋大よ怒。よ急よ城をはれ。バ玄徳諫て曰く。昔漢の高祖の天下得て。能降參の。を用ひ。よか。今賊軍降らんと望む。將軍ちんぞ許。玉乞。朱雋笑く。曰く。あらう。此まことよ天の附。依もひ。昔秦の事。だして。項羽が如き。軍たゞひよ。争そう。天よ定まし。君よ。高祖。ふの。よ。降る。者。如何。争。讐。う。とも。も。だけ。玉。今に海。統の。立。黄巾の。賊。の。禍。を。う。そ。若。其。降。參。を。許。さ。何。を。以。て。善。を。せ。と。賊。徒。刀。の。まよ。悪。逆。を。ゆ。利。を。失。ふ。附。へ。即。ち。降。參。と。身。を。恙。なく。せ。ん。と。な。ら。は。是。寇。を。長。む。る。の。道。を。う。へ。我。此。

がよ根を絶んどと。玄徳其論服。又告て曰され給。今
の城を四方より密々圍。一人も余さず討んとせば。彼必ず
一圖よ志。合せて討死をべ。万人心を一にして戦ふ。味方も若
千人ぶがし。大敵を六用と攻ること利。其逃るを追う
ちはて勝を渴ん。朱雋をとく。城中の軍勢。立先よと東南の門よ
り攻たり。バ案の如く。城中の軍勢。立先よと東南の門よ
逃走る。官軍勢を乘て追う。散て攻め。賊將韓忠既に朱雋よ
射殺す。浩然。趙弘。孫仲。大勢を引く。馳走り。追手の官軍を
さて火を擲て。戦ふ。朱雋。賊の大勢。を見て。少一退とし。
凡て。賊軍是よ氣を得て。潮の豆ふ。妙みみ。宛城を取ぬ。と
官軍若干討れ。十里退く。陣を取り。其日の暮がて。東の
官軍若干討れ。十里退く。陣を取り。其日の暮がて。東の

方より一夥の軍馬馳来。真先よとむ。廣額闊面虎熊。熊
腰吳郡富春のへ。孫堅字は文臺とて。古の孫子が未葉。う
ね。邊ゆき。此。下邳の亟なり。黄巾の烽起をや。淮
泗の精兵千五百騎を引て。官軍よ力を懼む。朱雋ら。毛ちゆ
喜び。便ち孫堅よ南つを攻させ。玄徳よ北つを攻させ。自ら
西つを攻て。能く東方を圍はむ。あきへ敵の心をよろさ
で。心をとく走らし。と計。若ちう。孫堅へ此目。射手なれど
眼を醒まし。不ぞ。一軍せんと。自ら馬より飛んで下り。やもくと
壕をこゑと。城中よ登り入。是を討へ。とて城中の勢。ひりぐと集
り。と。孫堅刀を棄して。目の前の敵二十余人を斬殺。し。
残る勢を八方へ追ぢ。やれ。賊將趙弘大よ怒り。馬を飛

て討てうる。孫堅是をみとせば敵の槊を甲の袖より受て趙弘が腕を握りとくを。そのよ槊を引奪て趙弘を刺こう。そのよ乗と。禍まいたる大物の中へ喰ぞうけへた。又宋右は宋勇を振て蒐たりしづ。賊將孫仲悚うねく。つよ逃走る。玄徳急ひ追うけ一矢よ孫仲を射落し。官軍われ先よと城中へ攻入。首を取り殺万級。南陽の諸郡益く平定しけした。朱雋都は聞く。車騎將軍河南の尹よ封せられ。孫堅は内縁ありて別部司馬よ除せらる。むろよ玄徳一人いまど恩賞の沙汰あきりしほ心懲然と。たのこまざ。或時禁つのかよ。郎中張均は失合。心労あいだも恩賞うきすを詣りし。張均大は驚き。急ぎ朝よ生て奏すと。近年黄巾の賊よ起て。

不くを乱り。一本を尋ねば十常侍が君を欺て人の賄いを受へ。切ちきよ官禄を与。賂うき考へ罪なきよ友を賊を。是故よ人民の恨。たのよ天下の乱と。うきり早く十常侍が首を刎ぐ。一とよ南郊よ梟ぬぐ。通く天下よ告げ。かある者よへ恩賞を賜ひ。四海自ら平安ちらん。と。憚ら不うそく下け。武士よ令ど。首を斬るむ。と。云々。張均君を欺て人を説す。其まやで死ふ。帝是よ御心をき。何さま黄巾の賊を破て。かある。恩賞よ預ぬ考へ。あれべこそ。張均氣を失く絶へり。切らる考へ。御尋ありて。玄徳も中山府の安喜縣と云の尉よ除せらる。玄徳恩を謝。即時よ閔羽張飛と二十餘人を促へ。

安岳縣の安石とよひて縣中の政を治めうる。月をうる有て
人民みち其徳みなほき。今まに強盜惡逆の名を取りたれ者も
己と羞て心を改め良民となりて服し。玄徳は關羽張飛と
食むる財へ卓を共より。寐る財へ床を同じて。四月ばかりもをぎ
け。石と天子から郡又詔を下す。此度黄巾の賊を平らげたる
よ軍功ありと詠て内縁うんとを頼る。猥りよ官爵を受た
る者多く能くおれを正とひと觸られしれべ。安岳縣も督
郵未し。玄徳遠く先遣へて地の上より禮をやり。されば督郵馬の
上より鞭を指揮して面咎を。關羽張飛をもらひ立其無礼うち
をえく。歎をくいもどつても敢て詞よりも相隨て館中より
到る督郵少も譲らむ。正面より坐し。されば玄徳慎て階下より
官爵を盈む。是より因て天子我より勅し。沙汰へ正させ玉ふとひ
化れば玄徳默然として退き。下吏を呼んで督郵威をあてて人を
畏をひき。がそと向ふ下吏を呼んで督郵威をあてて人を
徳の曰。我民を治めて秋毫も犯さず。何人ぞ彼より賄ふ
錢あらんやと。子より賄をよびざり。次日督郵其賄を
きを怒り。下吏を召す。玄徳猥りよ民を害もと訴狀を出
せて請取けり。玄徳自ら館門より到り。内へととへば番の者

共許さざりと徒々退き。心の内安らざり。張飛酒を飲んで後只一人馬よりのり。館門の前を走ぎる。年老たる百姓共五六人泣居たり。されば。いかなる所ぞと向ふ。答て曰。督郵ましろのを取ん。又。縣吏を召て訴状をよせ。天子より奏して罪をきふ。玄徳を害せんと。我ホここより來り。其事を告て。玄徳の恩徳を露さんと。されば。門より内より出で。却てさゞようち失され。又。張飛是をちて大よ怒り。牙をうんで馬よりびきり。直ちに館門より走入。番の者共。是をへどして。益々集り。るを。張飛四方へ追ちらし。堂中より見し。督郵す坐て。縣吏を責。張飛雷の如かる声を励して。民を害する逆賊此張飛を刃初めやと叫び。虎鬚倒み上りて。怒きる眼。百練

の鏡の如く。ありべれ。督郵大よをどろき。左右を下氣と捕んと。もよ。張飛力足を生じて。ちうそく。奴を踏倒し。飛くなり。督郵が唇を摑んで。中提げ。憎き己へすくも。不へ来し。て。督郵が唇を摑んで。中提げ。憎き己へすくも。不へ来し。ると云ふて。門外は曳て。又。傍見る柳の木よ。綁あげ。自ら柳の下枝をわざ。督郵が腿のあたりを。ほけ。二百打け。柳の大枝枝十本を。打ち。もうち。誠ふ。物さへ。がくく。やれ。何ゆ。ぞと問ふ。一人走り來り。曰く。張飛酒をとおへんを綁く。痛く鞭う。今。定て。打殺と。やへん。玄徳。守もあへひ。走り。是を見れば。張飛が怒り。叫声。体を。督郵を。柳の梢よ。鉤あげ。又。玄徳大よ。敬罵。色を失い。よへそも。いふる。なぞと。問ふ。張飛大息。はいと。曰。是ホの賊。民を害。

安喜
張飛
縣
督郵
鞭

張飛



督郵



る曲者なり。打殺さむんべ心ありとて又うる技を振上さし。
又打擲を。督郵本の上より玄徳を見たけ。苦げうる声にて。弓
へ玄徳公願く一命を救ひ。玄徳仁慈の心深くし。急に張遼
を推す。もろ石を。关羽は行と馳來て曰く。兄。せよ莫大の功を立
ながら。一縣の尉は除せらる。今又督郵は云ひしを。某思ふよ
り。別に遠大の計を。やん玄徳公ね。促の印綬を解て。督
郵が頸より。汝の民を害するの賊。今首を刎んむれども。我
心よ忍ざる。此のよ官をとく。圓をとつて。关羽張飛を
伴ふ。涿郡へぞ聞られる。其後百姓共集り。督郵を柳の上うち
下へ。督郵曰て定尼の太守。よ訴ふ。太守此由を朝廷よ奏す。

去程。黄巾の賊滅て。天下又静たり。然べ。十常侍。よく君よ
只。尺。て。専ら權柄を。とり共に相議。と。己が心よ。從ひる
者ハ。科を。きに誅殺。と。趙忠張讓。入へ。今度の軍功。よ。依て。恩
賞。よ預てる。人。この方へ。密。よ人。を遣す。と。賂。を求む。されどり。皇
甫嵩。高朱雋。二人。い曾て。与。ひざり。も。や。が。天子。よ。説す。と。彼。ふ
が。黄巾の賊を。平らげて。功勞。ありと。や。更。よ。実。な。き。り。よ。て。天
威。四方。よ。及。ぐ。官軍招ざる。よ。あ。は。ま。り。賊徒。自然。よ。滅。び。た。れ
る。り。と。奏。一。れ。を。帝。あ。き。を。信。じ。と。即。時。よ。皇。甫。嵩。高。朱。雋。が。友

何進謀殺十常侍

兵を。指向て。玄徳を。捕。ん。と。一。れ。ば。玄徳。ゆ。の急。なる。と。一。轡。を。車
よ。の。せ。代。及。よ。り。て。劉備。を。頼。み。暫。而。よ。う。く。一。ぞ。居。れ。る。

を剥て趙忠を車騎將軍に封ド。張讓ふ其外の内官十三人を
同時ニ列侯よ封ト。又司空張溫大尉に昇リ。崔烈司徒ニ任せ
ら。又皆十常侍に阿リ附て。ようづ私のミタリと公る。改道
ウリ。レバケ私ノリ共日。又長道と上下盈く恨を含み。漁陽。又
張舉。又。謀反。自ら天子と称し。弟の張純。又。將軍と
号。其外長沙江夏の賊徒。諸石。又。蜂起。と。遠近急を告。又
雪の飛が如くなれども。十常侍是をうく。天下。又。平。よりとの
奏。又。或日帝後園。又。大。十常侍と酒宴。又。い。れ。諫議太
夫劉陶。仰前。又。未。大。勤く。帝其故。向。又。劉陶。旨。漢の天
下。又。や。き。且。夕。又。ア。陛下。又。不。内。安。ど。樂。又。小。帝宣く
今。天下。太平。の。日。い。ま。ス。危。き。り。う。ある。劉陶。又。曰。四方。の。通。徒

蜂の如く。起り。そ。又。郡を掠め。乱る。其禍。皆十常侍。官を賣
民を害するに因り。朝廷の徳。又。人へ隠れ去。譖。侮の人。臂。を
張。其禍。目。の。あ。又。あり。十常侍。あ。を。や。て。皆。冠。又。卸。て。漫
御。流。又。大臣。又。け。ご。と。く。臣。ホ。を。疾。んで。害。せ。ん。と。と。願。く。一。食
を乞。又。と。故。又。回。り。官。至。と。そ。身。を。全。せ。ん。と。哀。み。れ。帝
又。怒。て。劉。陶。に。向。て。宣。ひ。け。る。汝。が。家。又。も。近。侍。の。人。を。用。朕
な。そ。正。帛。侍。の。友。又。う。ら。ん。や。と。武。士。又。令。じ。と。首。を。斬。ら。る。
劉。陶。哀。又。み。叫。び。臣。死。と。と。も。何。ぞ。怕。人。惜。ひ。だ。漢。朝。四
百年。の。天。今。月。忽。ち。に。滅。び。ん。の。を。と。か。て。門。外。よ。引。生。き。
財。又。司。徒。陳。耽。外。よ。未。り。け。ぶ。劉。陶。を。斬。ん。と。と。を。見。て。急
々。是。を。止。め。宮。中。へ。へ。天。子。に。見。る。劉。陶。い。う。な。る。罪。あ。り。く。誅。

と問ふ。帝宣く。十常侍を誅り。朕もふて冒
を。あの又。誅せしむ陳耽。眞く天下の民も。十常侍凶と笑ひ
と。福が。志より陛下を。教へ。父母の。とくのよ。まき。いふ
る理。十常侍へ身。すの功もあく。三。列侯。封せら。と。況
人。封爵。除奉。あ。黄巾の賊。賂を。受へ。内。應せん。と。うるわ。あ
陛下。早く。お年を。誅。多く。ど。漢の天。ト。う。あ。う。ど。そ。も。一。帝宣
く。封爵。ホ。が。賊。と。内。應。しなり。と。う。へ。三。お。実。あ。ま。う。り。あ。
十常侍の内。二。の忠臣。あ。き。の。へ。あ。う。一。汝。こ。なり。と。説。も。る。あ
と。あ。三。陳耽。あ。公。再。三。諫。る。と。帝。大。怒。ゆ。ひ。陳耽。も。ひ。き
止。と。劉陶。と。も。獄。エ。ト。一。タ。ひ。れ。と。十。常。侍。そ。の。夜。ひ。そ。う
ス。人。と。つ。う。や。と。二。人。と。死。モ。セ。リ。う。と。哀。く。ま。そ。の。ち。趙忠

使。を。は。く。孫堅。を。長沙。の。太守。と。封。ド。謀反。の。賊。を。誅。セ。し。る。よ。
又。十。余。日。を。徑。く。長沙。の。逆徒。區星。と。で。よ。滅。び。な。り。と。奏。し。た。が
十。常。侍。勅。命。を。傳。て。孫堅。を。烏程侯。と。封。ド。又。劉焉。を。益州。の
牧。と。封。ド。而。川。の。賊徒。を。誅。セ。し。ム。劉虞。を。幽州。の。牧。と。封。ド。漁
陽。の。張。举。ホ。を。追。討。セ。し。ム。劉焉。先。兵。を。引。く。而。川。を。攻。め。べ。賊
徒。盈。く。降。參。一。即。ち。倉。廩。を開。き。百姓。を。賑。へ。と。圍。中。の
德。と。限。じ。不。日。よ。皆。平。定。と。劉虞。へ。兵。を。起。し。と。漁。陽。よ。向。え
と。も。る。而。に。代。へ。の。劉恢。玄。宮。を。添。て。玄。德。を。と。む。劉虞。大
又。玄。徳。を。都。尉。と。丘。毅。を。先。鋒。と。て。漁。陽。に。ト。向。し。
殺。日。戰。か。て。勝。負。を。分。た。ざ。る。不。よ。賊。將。張。純。凶。暴。を。專。じ。て
み。だ。り。に。士。卒。を。鞭。うち。る。か。諸。軍。心。を。変。じ。と。張。純。が。首。を。とり

益く降へよ坐りて張舉も又の諸ざるを見く。自ら頸を
縊く死る。漁陽忽ちに平定せり。劉虞表上て玄德
の勲功ある由を奏しければ朝廷詔を下す。往日督郵を
打たりし罪を宥して下密の丞よ封ド。又ひ又あるモの尉よ遷る。
公孫瓚も表を上て玄徳の功と拔群の功ある由を奏
へ。郎附よ別部司馬よ任じて平原縣の令よ封ぜらる。
玄徳恩仰謝と平原に到り此所の錢糧の用意澤山已
て軍馬の備もありなし。日比の家を直して居び。劉
虞。漁陽を平らげて功よ因よ大尉よ任ぜらる。中平六年
夏四月。帝御不例の日ありて日よ重り。今へとてに危く々
々在べ密よ何進を召て。欺のく殺人と謀多。其故を委く

考ねれば此大將軍何進は元來その身極めて賤き者なり。が
其妹天子よ寵せられと貴人とやりなる故よ。其身は大將軍よ上
て天下の兵權を取弟の何苗も執金吾よ封せらる。去ぬる光
和三年。何進が妹何貴人太子劉辨を産り。是よ因くに之のよ
皇后に立らる。何進は皇后の兄なるよ因くいすく權柄を取け
り。其後帝又王美人を深く愛り重ひて此腹よ劉辨と云ふ
る皇子出來たり。何皇后是を妬んで了よ王美人を鶴
毒よて殺せり。此よ劉辨の董皇后よ養れ翠ふ。己よ太子劉
辨而年九歳よめらを詔ふ。帝いふ思召と先弟の劉辨
よ天子を殺んとそ。常に近侍の臣よ宣ばれを。十常侍并み黄
門蹇硕ホひそよ奏してやける。若劉辨よ天下を殺うんと

やつア事ア先何進を除キ。太子劉辨ハ何進が妹の腹ア
來たれば何進兵權を專ム。その又劉辨を君とぞ。し。
今陸ト所懼をもんに危。是よりを詫跡の事云並んとて何
進と宮中玉口ヨ共伏てちもとを殺し。その後劉岱と立
る後の禍あるが、帝あきに因よ。その又何進をつはり
べ何進いそぎ宮内又へんと立ちあふ。司馬潘隱來り。密に私
語て内へ入る十常侍。兵を伏て殺しと謀れりと告げれど
何進大々聲き急ぎ門前より引うを。百官と私宅もあはれ
て十常侍を誅せんと議と。併よ赤坐より一人もみ生内多の
勢ひと。中帝質帝の附す。相つるで朝廷は滋蔓を
何んぞ益く滅ぼすをほん。若計を仕復トスバ。却て丈

ある禍をあんよそ子細もあむへと云ひ。然人あれをも
よ。典軍校尉曹操なり。何進笑く。然小輩いとんぞ。朝
廷の奉りをねん。猥り多言もるゆえ。司馬潘隱幸り來り。
天子今嘉德殿に崩トゆる。十常侍あきひ隠て人よもせ
ぞ。先何進を宮中へ立し。後の禍を除キ。劉岱を立て。御位を
繼立らんと定め。使來るが一と云ふ。而も忽ち又勅使來
リ。天子もでよ危。早く何進を召して。後の事を託す。然
云ひ。然曹操が曰く。今日の計。先君の位を正て。其後の賊を討
玉へ何進が曰。誰う我う爲よ。君を正して。賊を討
せて曰く。某願くのみ千の精兵を率。新君を冊立す。
益く内友を誅せん。諸人よきを見。其人良相恩偉行歩



威りく四世三公又登り門下。故吏多く武藝辟々超海
南汝陽の人よ。漢の司徒袁安の孫袁達が子。袁紹字
本初。印司隸校尉あり。何進大よろあびりも。袁紹
まぐる鎧。御林の勢五千余騎を率いて。たち内裏
よそよせ。四方と用ひて入と通す。何進へ何顕荀攸鄭泰
あんまり大臣三十餘人ともあひ相續。官中より盡
帝の柩の前。太子劉辨を帝位に即たり。百官もあ
万歳と祝う。袁紹兵と下知して内官を捕つむ。蹇硕と
ては逃きぬる。袁紹討と號す。拒まつる。袁紹鈞を失
と。竟り。その威と怕みて。園の内へ逃入り。花の薙えらま
りと中常侍郭騰と別れて斬死。首と手足と下だり。

袁紹とあも。何進。内官も黨でひもんで禍をあも。
一人のさしご殺しゆ。さうぶどの後又大も害をあさんと
は。六十常侍事の急ある。とて。室を。何皇后の宮中。行戻れ
を。あひて哭き。あひもと計をす。けく大將軍と討ひ。を。へ
蹇硕一人が所為あり。某ふう志る。あはうど。あらまえ。將軍
は魏者の言と。きひ。某ふうと。ぐく殊せんと。と。ひ。殺され
哀辛くて助ひへと。ひ。何皇后の旨。汝患る。と。あひ。と。ひ。家
か。ひ。と。ひ。と。ひ。何進と宮中。よ。福を。と。汝と貪賊の
よ。せ。へ。あり。の。ま。蹇硕と。ひ。謀。めう。汝又他人の謀を。ひ。く
内官と。と。ぐく殺さ。と。ひ。ふ。あ。み。の。も。あ。す。千載。の。ぞ。と。得。く。

とのなり。何進外に生。百官より多く廢。穢もまことに害せんと計り
しも。令とて。詐謀せらる。その余の内官もとす。罪あり。一人も
殺さず。袁紹を。今日草を刈り。根を除き。後ある。
害とす。何進も。曰く。まがんもと。決せう。ふ。びゆ。の。首
七斬。と。百官をひきとどく。退坐。も。の。日。何太后朝。坐。何
進。と。録尚書事。す。も。百官をのへ。封賞あり。如君。を
け。政事を。治。ま。董太后の。ひき。ひき。三十常侍。と。宮中
よ。ま。林。きよ。と。何進。特。ぞ。も。先帝。よ。ま。む。今日。の。子
劉辨。帝位。と。即。内外の群臣。ま。よ。よ。す。勢力。ひ。ま。ふ。盛
へ。王美人。腹。と。生。ま。劉恢。と。養。て。子。と。先帝。も。常
劉恢。位。と。嗣。し。ら。との。なり。いま。ま。この。い。き。を。き。と。問。な。ま。

張讓。ホ。奏。と。曰く。太后。ミ。朝。朝廷。又。生。て。簷。と。な。を。政。と。聞
ひ。す。國舅。董重。と。武官。と。も。某。ホ。代。も。く。わ。ち。ひ。あ。く。
あ。が。ひ。權柄。と。の。く。何。進。ホ。威。勢。と。奪。べ。董太后。是。從
ひ。次。の。日。朝廷。よ。生。て。ま。が。う。政。と。きて。劉恢。と。陳留王。と。封。ド。董
重。と。驃騎將軍。と。封。ド。十常侍。と。あ。高官。と。ざ。ば。け。と。も。天下
政事。と。決。し。く。何。進。と。綺。せ。ざ。り。生。べ。一月。や。り。り。も。だ。く。權柄
エ。づ。く。董太后。と。取。て。天下の。政事。と。の。裁。断。と。生。ぞ。とい。ゆ
あ。し。何。太后。あ。の。の。安。を。と。も。へ。ゆ。宮。中。と。酒。宴。と。す。け。と。
董太后。と。半。酣。と。と。く。も。が。う。盃。と。さ。げ。再。拌。と。と。同。
え。き。ホ。み。あ。女。の。身。あれ。を。朝廷。と。生。て。政。と。き。く。の。そ。の。宜。き。き。あ。ゆ。
む。じ。呂。后。權。と。の。却。て。九。族。と。滅。せ。り。ま。き。ホ。ひ。た。九。重。の。内。と。深。く。

居て朝廷の政を太老元臣もまわせあべ四海とのがくを太平あり。董太后も怒て曰く汝荒淫うそと色を妬み王美人以鷦毒も死ひ汝が子や天子ともあきを何進うみどりよ大將軍も任ぜうよて威を専めどり也へ。汝みだらふ舌で動かすよきもあがむと驃騎將軍命令。汝が兄の首を斬しらん何太后も声をあひびげて曰く可且一言を。汝うそと汝みだら汝はあれば無礼の言葉を吐せよ董太后のいふ汝のもと褚と屠沽したる家々生をあふの知恵あつくり口をきくぞと二人きぬぐ悪口とほらみあふ風情あつりと。張讓と董太后もひいて宮中より回る何太后その夜何進とま福の事いうと。計々と宣べ何進とぞひて大臣ともひまとの事を評議する。董太后と河間もうがをべーといふをあづく。おの義もうべーとて董太后と河間もうがをべーといふをあづく。

太后乃郡々交通して財利を貧り女の身と政ときて賞罰私とあくよ沙汰して董太后と河間と辻に置三千余騎と。驃騎將軍董重と討ひとその家と聞えまべ董重もく頭をあく後堂と死と十常侍事の叶ふるくらべ金銀珍宝をひそむ何進が弟の何苗とあく。その母の舞陽君あどり賂と。何用ひそむと頼み巧言をやく無事あるとを得たり。その年の育と何進ひそむ鷦毒とあり。董太后と死と文陵と葬る司隸校尉袁紹ひそむ告て曰く十常侍があのごろ詫罪もひ傳て將軍の董太后と死しゆへる。天下と奪の企をうそ沙汰をあのとたの内で内官と入のまきを殺し。志をまぶ後大あ。害をあさるむし賣武の計をあまと密をも却てその身を滅ぼせり。いま將軍兄弟

御林の軍を統ひ手下的英雄の大將を率い。事もま掌みあつたれ
天の助る所あり何進が曰く。まがる如是。一日を定めて誅せん
す常侍の事とはとへき。いそだ何苗を賂して頼り。何苗を賣
ち何太后の宮中に入り奏して曰く大將軍は新君を佐あぐ。仁慈
をもて天下を治る。思ぞう人を誅まとめて好んで西海太平
ある。又十常侍を誅せんとある。まき乱と招の道あり。早く諫めよ
ひる。何太后をあらう。何進をや。内官の權を執へ漢家の旧規。
先帝近比崩れ。汝は内官を尽く誅せんとまと社稷を重
んざるの道をあらざれ。ある。事行を勿れ。宣れ。何進もとす外
より大名を好む。りんご内を決断。あたはる。え。兎角の返事もあく。
退生も。

繪本通俗三國志初編卷之二終

